

津阪東陽『孝経發揮』をめぐって

Notes on Tsusaka Toyo's "Koukyou hakki"

梶山女学園大学文化情報学部長

二宮 俊博

Toshihiro Ninomiya

はじめに

本稿は、伊勢津藩の儒者津阪東陽の主著の一つ『孝経發揮』について、これを繙き自分なりに気のついたことや思うところを幾つか書き留めたものである。齢40を過ぎてから、彼の中国古典詩に関する著述を通して東陽その人に興味関心を抱くようになったが、今回、本誌「梶山人間学研究」第12号の執筆にあたり、これまで敬してこれを遠ざけてきた本書を取り上げ、駄文を草することにした。それとともに附属図書館所蔵の孝経文庫についても、いささかこれに言及した。

津阪東陽について

津阪東陽、名は孝綽（もとひろ）、字（あざな）は君裕（きみひろ）。通称は常之進。東陽はその号である。宝暦7年（1757）伊勢国三重郡平尾村（現在の四日市市平尾町）の庄屋の家（身分は郷士）に生まれ、8歳（数え年。以下、同じ）で父から『孝経』『論語』の手ほどきを受け、15の年に医術を学ぶために尾張名古屋に遊学した。名古屋には3年いたが、心中ではその仕事をいやしんだせいか結局ものにならず、いったん帰郷した。その間、宿野（菰野町宿野）の郷士の子で竹馬の友たる平井澹所（名は業、字は可大）—この人は後に江戸へ出て昌平黌に学び桑名藩儒となる—らと菰野藩

儒の南川金溪（名は維遷、字は文璞）から教えを受けたらしい。その後、伊藤仁斎・東涯父子の古義学を慕い儒者となることを志して京に上り、決まった師は持たずにほぼ独学で一家を成した。天明8年（1788）正月晦日の大火に遭って家財はおろか蔵書著述の一切を失い一時帰郷を余儀なくされたが、寛政元年（1789）33歳にして津藩に儒者として召し抱えられた。されど決して順風満帆とはゆかず、文雅を解せず教条主義的でリゴリスティックな立場をとる山崎闇斎派の道学者との対立軋轢に苦しみながら支城のある伊賀上野での19年におよぶ長い不遇離伏のときを過ごした。文化4年（1807）51歳にしてようやく津に召還され、英明の誉れ高い第十代藩主藤堂高兌（たかさわ）に引き立てられて藩校有造館の創設に尽力し、その初代督学（学長）に任じられた。落成した有造館では、その記念に『孝経』を講義したという。時に齢64。その後も教育行政や民生安定のために意を用いたが、文政8年（1825）69歳で没した。死を迎える前年には自叙伝ともいべき生前の墓碑「寿壙誌銘」を著している。〈壙〉は、墓穴の意。

※有造館という名称は、孔子が編纂したとされる中国最古の詩集『詩経』の大雅「思齊」に周の文王がよく人材を育成したことを讃えて、成人した青年は徳を備え元服まえの少年は善行を修めたとする「肆（ゆ

え)に成人は徳有り、小子は造(な)すこと有り」から採られている。

その著述は数多く、文学方面でいえば、『夜航詩話』『夜航余話』といった詩話は、中国古典詩や邦人の漢詩を読む上で参考になる有益な指摘が多々あり、現在でもその価値や存在意義を減じていない。また「詩聖」と称される盛唐の詩人杜甫の七言律詩138首に達意の漢文で注解を施した『杜律詳解』(天保6年[1835]刊)も、吉川幸次郎・黒川洋一といった杜甫研究の専門家から高く評価されている。なお、国会図書館に写本の『東陽先生詩文集』14冊(文集10巻、詩集10巻。ただし詩集の巻2は欠)が伝わる。

東陽の評伝には、その裔孫にあたり詩人・児童文学者としても知られる鈴鹿市在住の津坂治男氏に『津坂東陽伝』(桜楓社、昭和63年)および『生誕250年 津坂東陽の生涯』(竹林館、平成19年)がある。

※『夜航余話』については、新日本古典文学大系『日本詩史 五山堂詩話』(岩波書店、平成3年)に揖斐高氏による校注が収められている。ちなみに、『杜律詳解』については「文化と情報」第3号(平成13年)および「文化情報学部紀要」第1巻(平成14年)から第13巻(平成26年)まで全15回にわたって訳注稿を掲載した。また、『寿壙誌銘』は拙稿「津坂東陽『寿壙誌銘』訳注稿」(『文化情報学部紀要』第14巻、平成27年)参照。東陽の京都遊学時代に関しては「覚書：津坂東陽とその交友(1)―安永・天明期の京都」(『文化情報学部紀要』第15巻、平成28年)に、南川金溪や平井澹所との交友は「覚書：津坂東陽とその交友(2)―文化11・12年の江戸」(『文化情報学部紀要』第16巻掲載予定)にこれを述べた。なお、東陽は津坂を津阪と表記することが多いので、拙稿ではすべてそれに従っている。

『孝経』とは

『孝経』は儒教の經典、十三經(易經・尚書・詩經・周礼・儀礼・礼記・春秋左氏伝・春秋公羊伝・春秋穀梁伝・論語・爾雅・孟子・孝経)の一つである。全一卷で、古くは孔子の自著とみされ

たこともあったが、孔子とその46歳下の弟子曾参(そうしん)との孝についての問答を曾参の門人もしくはその学派がまとめたものとされる。テキストに『今文孝経』18章の系統と『古文孝経』22章との二系統がある。今文というのは漢代における今の字体(隸書)、古文は蝌蚪文字(蝌蚪はオタマジャクシの意。蝌斗・科斗とも表記)のような古い字体の意である。煩を避けるために詳述は避けるが、前者には後漢・鄭玄(じょうげん)が注をつけたとされるものの、唐の玄宗の御注が作られると散逸し、後者には後漢・孔安国が伝(注の意)を附したとされるが、梁末に亡び隋代に再び世に現れたのは孔氏の旧本ではないとされる。その後、これも西土では散逸したものの、孔伝は我が国に伝わっていたのを、太宰春台が享保17年(1732)に『孝経古文孔氏伝』として刊行し、鄭注についても我が国に伝存する『群書治要』(初唐・魏徵ら奉勅撰)をもとに、その復元がはかられ、尾張の儒者河村乾堂(名は益根、字は培公)が寛政3年(1791)に『孝経[鄭注]』を、同6年に岡田新川(名は宜生、字は挺之)が『孝経鄭注』を出版した。春台の刻した孔伝や新川の鄭注本は、当時の清国に渡り西土の学者を驚かせた。

※ちなみに、書物の保存に関して、笹原宏之氏に中国は「上書き保存」がなされ、日本は「別名保存」をすることが多いという興味深い指摘がある(『日本人と漢字』、集英社インターナショナル、平成27年)。

そもそも『孝経』はわが国でも古来読み継がれてきた文献だが、江戸時代には上記以外にも各種テキスト類や注釈書が中国書の翻刻や邦儒の著述を含め数多く上梓された。漢文の注釈ばかりではなく片仮名交じり文でわかりやすく文意を解説した国字解と称する初学・一般向けの本も幾つかある。

※江戸期の刊本については、阿部隆一・大沼晴暉両氏による労作「江戸時代刊行成立孝経類簡明目録」（森武之助先生退職記念論集『斯道文庫論集』14、昭和52年）参照。さらに大沼晴暉氏には「孝経目録補遺並江戸時代孝経刊行年表」（太田次男教授退職記念論集『斯道文庫論集』21、昭和60年）がある。

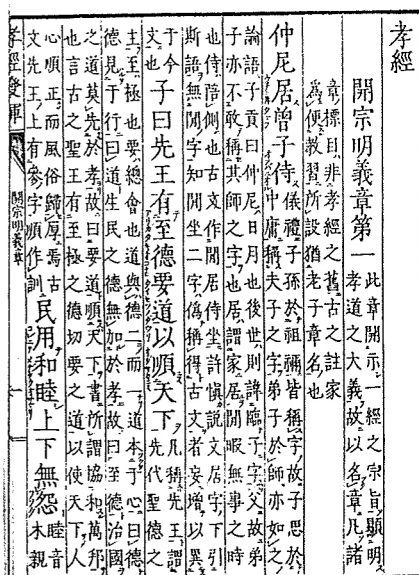
なお、本学園の創立者相山正式先生にも「孝経解題」があり、古文孝経のテキストを善しとする立場から、簡潔で要領を得た記述がなされている。このこと、本稿の「相山女学園大学の孝経文庫」でも後述する。

現在、入手しやすい訳注本として、林秀一『孝経』（中国古典新書、明德出版社、昭和54年）、栗原圭介『孝経』（新釈漢文大系35、明治書院、昭和61年）、竹内弘行『孝経』（タチバナ教養文庫、平成19年）、加地伸行『孝経〈全訳注〉』（講談社学術文庫、平成19年）などがある。これらのうち、古文系の本文に拠るのは林・栗原の両著で、竹内・加地の両著は今文に基づく。

※いずれも中国哲学・思想史の専門家の手になるものだが、とりわけ平易で読みやすいのは竹内著で、加地著にはその第四部「『孝経』・孝に關連して」において、『忠経』などの周辺資料に言及するほか、孝に見える宗教意識を明らかにし、孝と日本人との関わりをコンパクトに説いており、きわめて有益である。栗原著は語釈等が詳しく他の儒教の經典との関わりが事細かに記されている。なお、林氏には專著として『孝経』の文献学的研究である『孝経論集』（明治書院、昭和51年）、儒教を沈黙の宗教としてとらえ直した加地氏には『孝研究 儒教基礎論』（加地伸行著作集Ⅲ、研文出版、平成22年）がある。

『孝経發揮』の特色

津阪東陽の『孝経發揮』は、今文のテキストを本文とし、諸注を参照して漢文で書かれたもので、文政6年（1823）の自序があり、文政9年（1826）に刊行された【図版①】。『發揮』とは、内なる道理・意味を外に明らかにするといった意味で、経書の注釈に名づけられた先例として、伊藤仁斎の『中庸發揮』（正徳4年〔1714〕刊）がある。本書は上記の林・栗原・竹内・加地各氏の『孝経』訳注のいずれにも言及されていないが、今これを読んでみる



【図版①】

と、それなりに面白い。

巻頭の「孝経發揮を刻するの序」では刊行の意図目的を明らかにし、ついで「孝経序説」を掲げて、『続日本後記』や『三代実録』を引いてわが国で東宮の読書始に『孝経』が用いられたことを述べるとともに、古文を取らず今文を採る理由を説いているが、これは一種の学説史となっている。そして、本文には古文との文字の異同を記すなど、学術的にもかなりしっかりとした内容である。

かかる本書の特徴としてまず挙げられるのは、ところどころ本文の左側に附された和訓の存在である。こうした左訓の活用は、上述の『杜律詳解』にもみられるが、その面白さを最大限發揮しているのが文政9年（1826）刊の漢文による笑話集『訳準笑話』であろう。これは、それらが初学向きの教科書として作られたことと無縁ではない。とりわけ「習文楷梯」として読み物の面白さを重視した副読

本的性格を有する『訳準笑話』や、儒学の入門書を兼ねるこの『孝経發揮』の場合は、その意図が明瞭である。

※『杜律詳解』の和訓については、土屋泰男「津阪東陽著『杜律詳解の和訓に関するメモ』」(大修館「漢文教室」131号、昭和54年)があり、和訓を五十音別に整理され、検索に便利である。

そこで、「開宗明義章第一」の本文を挙げ、それを東陽の和訓を活かしながら以下に読み下しておく。なお、和訓はすべてカタカナだが、ここではわかりやすくするために〔 〕内に漢字ひらがな交じりで表記した。また()内は私に附した読み仮名である。

仲尼居、曾子侍。子曰、先王有至徳要道、以順天下。民用和睦、上下無怨。汝知之乎。曾子避席曰、參不敏、何足以知之。子曰、夫孝徳之本也。教之所由生也。復坐、吾語汝。身體髮膚受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。夫孝始於事親、中於事君、終於立身。大雅云、無念爾祖、聿脩厥徳。

仲尼、居す〔うちに居たまう〕、曾子侍す〔お側におる〕。子曰く、先王、至徳〔ありがたき行い〕要道〔たいせつの道理〕有りて、以て天下を順〔おだやか〕にす。民用〔もつ〕て〔これにて〕和睦し〔めでたく治まり〕、上下怨むこと〔不足〕なし。汝これを知るか。曾子、席を避けて〔座をさがる〕曰く、參、不敏〔愚か者〕、何ぞ以てこれを知るに足らん。子曰く、それ孝は徳〔たしなみ〕の本なり。教〔さとし〕の由て生ずる〔できる〕所なり。復〔かえ〕り坐せよ。吾れ汝に語〔つげ〕ん。身体〔からだじゅう〕髮膚〔髪の毛・肌の皮までも〕これを父母に受く、敢えて毀〔こぼ〕ち傷〔や

ぶ〕らず〔けが・あやまち〕、孝の始め〔初段〕なり。身を立て〔侍を仕立てる〕道を行い〔つとめを励む〕、名〔手柄〕を後世に〔末代まで〕揚げ〔のこす〕、以て父母を顕わす〔面目〕、孝の終わり〔充分〕なり。それ孝は親に事〔つかまつ〕るに〔つかわれる〕に始まり〔こぐち〕、君に事〔つか〕うるに中〔なかご〕し、身を立てるに終わる〔仕上げる〕。大雅に云う、爾〔なんじ〕の祖〔せんぞ〕を念うことなからんや〔忘れおかず〕、ここにその徳を脩〔おさ〕む〔みがく〕と。

改めていうまでもないことながら、〈仲尼〉は、孔子の字。〈曾子〉は、曾参のこと。〈子〉は、先生の意。〈先王〉は、古代の偉大なる王。〈避席〉は、東陽の和訓では「座を下がる」とするだけだが、漢文による注に「礼に尊者問うこと有れば、則ち席を避けて起ちて答う」というように、孔子の生きた時代は床上に席(長方形の敷物)を置きそこに座る生活で、師など目上の者に対するときには、起ち上がり席からさがって応答したのである。それゆえ師たる孔子から質問されると曾参が「席を避」けて答えたのであり、そこで孔子が「まあ、座りなさい」(「復り坐せよ」)といっているのである。これは余談ながら、今の学校現場ではどうか知らないが、かつては児童生徒が教師からあてられると、着席したままでなく立ち上がって答えたのは、その伝統習慣が我が国でも受け継がれたためであろう。今日、入学式・卒業式において起立・礼・着席というの、それを儀礼化したものと考えられる。それから最後に挙げられているのは、『詩経』大雅「文王」の一節で、〈聿脩〉は聿を陳の意に解して「聿(の)べ脩む」と訓ずることが多いが、東陽は南宋・朱熹の『詩集

伝』の解釈に従っている。

なお附言すれば、東陽の名である孝綽の孝を「もと」と訓ずるのは、本章の「孝は徳の本なり」に基づく。

ところで、「開宗明義章」の最後に大雅「文王」の一節を挙げるように、古文系・今文系を問わず、各章の末尾には『詩経』や『尚書(書経)』などの一節が引用されているが、朱熹の『孝経刊誤』は、これを本来あったものではなく後に附加されたものとして刪去する。『刊誤』を踏襲する元・董鼎『孝経大義』も同様である。東陽は、前漢・劉向の『説苑(ぜいえん)』『新序』『列女伝』と「文法相類す」とみて、朱熹の見解に一定の理解を示しながらも、「古人は文辞がそれで終わっても意を尽さぬ場合は、多く『詩経』を援用してその余意を吟詠した。あるいは賛美したり、あるいは戒めとしたりして、これを諷詠させて自得するようにさせた。人の感情を深く動かすからである」と述べ、『漢書』匡衡伝に「大雅に曰く、爾の祖を念うことなからんや、ここにその徳を脩むと。孔子これを孝経の首章に著す」とみえるのをあげて、前漢時代の古いテキストにすでに存在したと結論づけて、これを削らずに存している。

さて、「開宗明義章」の和訓で注目すべきは、「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」の解釈である。ちなみに、加地著に指摘するごとく明治17年(1884)に発表された文部省唱歌「仰げば尊し」の二番の歌詞に「身を立て名を揚げやよ励めよ」とあるのは、この一文に基づくが、これを「一人前のりっぱな侍となり務めを励み、手柄を末代までのこ」し、「父母の面目」を立てること、それこそ孝を充分尽くしたことになるとしたの

は、『孝経發揮』独自の解釈であろう。

それでは、東陽はどのようにかかる和訓を施したのか。『東陽先生文集』巻四に「身体髮膚不敢毀傷弁」がある。〈弁〉(辨)とは文体の一種で、是非真偽を弁別する意。そこには「孝経の書は専ら人上を為す者の為に言を立て、政治の本源を明らかにし、君道の至要を述ぶ」と述べている。「人上を為す者」とは人の上に立つ者の謂いで、『尚書』五子之歌などに見える表現だが、東陽は『孝経』を人の上に立つ者が世の中を治めるための書物だとしている。東陽の「弁」を引かずとも、『發揮』そのものにも「この経の主意は専ら国家を治める者の為に言を立て、政治の本源を明らかにし、君道の至要を述ぶ」と明確に言う。つまり、為政者としての政治の要諦を説き、民を導く心構えを説く修養書とみたわけである。したがって、東陽のいう「手柄」とは、必ずしも武功武勲を意味するのではなく、牧民官としての功績をいうものと考えられる。

それから、「身体髮膚不敢毀傷」についてであるが、その解釈をめぐっては異説がある。東陽によれば、荻生徂徠や太宰春台は孔安国の伝に「能く自ら保ち全くして、刑傷なきは則ち其の孝の始めと為す所以の者なり」というのに従って刑罰に遭わぬことだとする解釈を採った。例えば、春台の『古文孝経国字解』(明和7年[1770]刊)には「ワガ身ヲカヘリミレバ、イタダキヨリ足ノウラマデ悉ク皆父母ノ身ヲワケタルモノナリ。コノ遺体ヲ全クマモリ刑ニアワザルヲ孝ノ始メトスルナリ。先王ノ制ハミナ肉刑ニテ身体髮膚ヲヤブル刑ナルユヘ罪ヲ犯シテ刑ニ遭フヲ不孝トス」と説いている。また徂徠の説はその著『論語徴』(元文2年[1737]刊。平凡社東洋文庫に小

川環樹訳注を収める)の泰伯篇「曾子疾有り、門人を召して曰く…」の条に見える。かかる解釈が出てくるのは、中国古代に五刑(墨・劓・剕・宮・大辟)という肉体を傷つけ損なう刑罰があったからであるが、東陽はその説を非とする。東陽の論理はこうである。孝子たるものの、刑罰に罹らぬようにするのは当然ではないか。ましてや『孝経』は「人上を為す者」のために説かれているから、そのようなことをいう必要はない、とするのである。これは東陽が引用しているわけではないが、儒教の経典の一つ『礼記』の「曲礼上」には「礼は庶人に下らず、刑は大夫に上らず」という言葉が見える。礼の備わらないことで庶民を責めないし、士大夫たるもの、もし罪を犯した場合は、その良心の制裁に任せるべきであるという。そもそも儒教では、人の上に立つ君子がその徳(人格力)によって、民を感化・教化できると考える。したがって、罪を犯して刑罰に罹るようでは、君子とは言えない、とみたのだろう。それは名と恥を重んじる武士の心性のありようともかかわってくる。

※ちなみに、朝川善庵(名は鼎、字は五鼎)も、すでに文化8年(1811)刊の『古文孝経私記』巻下の「身体髮膚受之父母不敢毀傷弁」において徂徠・春台の説を批判している。善庵は古文を善しとし、東陽とは立場を異にするが、この条の解釈では軌を一にする。

ところで、「身体髮膚」の語について、〈膚〉に連ねて〈髮〉をいうのは「文辞の勢い」で拘泥しなくてよいと述べているのには、私など頭頂部がすっかり薄くなった者には苦笑を禁じ得ない。さては東陽先生も吾輩と同じ悩みを持つご同類であったのかと邪推して思わずにんまりしてしまう。これは「不敢毀傷」(〈不敢〉は、いわれなく～しない意)とあるから、自然と薄くなるのは致し方ないわけで、それ

こそ「泥すること勿(な)くして可なり」だ。されど、たかが髪の毛一本と侮るなかれ、西土では古代に刑罰の一種に髪をそる髡(こん)があり、その後も頭髮問題が大きくクローズアップされる時代があった。それは仏教が入ってきたときの出家者の剃髪であり、また満洲族の清が中国を治めるにあたって自らの習俗である辮髪を漢人男子に強制したこと(辮髮令)である。清末から辛亥革命前後の混乱期には辮髪廃止をめぐる笑うに笑えない喜悲劇が生じたようだが、髪の話には深入りしないでおく。

※東陽は「身体髮膚不敢毀傷弁」において、山崎闇斎がかつて儒者が総髪にしないのは『孝経』の主旨に背くものだと譏(そし)ったのに対して、髻を結うのは「国家の制」で「私に毀傷する」のとは同じではないとし、「礼は地を以て殊(こと)なり、法は俗を以て異なる」のに、清朝の辮髪もこれを不孝とするのか、と反駁している。

辛亥革命前後の辮髪をめぐるちょっとした騒動については、魯迅に「頭髮的故事(髪の話)」(『呐喊』所収。学研版『魯迅全集』第2巻、昭和59年)がある。

それはさておき、このほか『孝経發揮』の和訓についての例を示すと、「諸侯章第三」の「詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷」(詩に云う、戦戦兢兢として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し)では、〈戦戦兢兢〉に「おづおづあぶあぶ」、〈如臨〉に「落ちはまらんを気づかひする」、〈如履〉に「踏みはずさじと用心する」と和訓を施している。〈詩〉は『詩経』小雅「小旻」(しょうびん)の句。ちなみに、〈戦戦兢兢〉は現代日本語でもよく用いられるが、〈兢〉字が常用漢字に含まれていないため、〈戦戦恐恐〉と書き換えて表記されることが多い。

さらに、二字以上の熟語・連語に施された和訓を挙げると、以下のような例がある。

・徳教……アリガタキナサレカタ

- ・四海……ヨモノウラウラマデ
- ・有慶……メデタクマシマセバ
- ・頼之……オカゲヲカフムル（以上、天子章2）
- ・不危……ヒヤイナラズ
- ・社稷……イヘクニ
- ・民人……リヤウナイカチウ（諸侯章3）
- ・法服……カクシキノシヤウゾク
- ・法言……モットモナルギロン
- ・德行……アリガタキトリハカラヒ
- ・沢言……ヨリヌクベキコトバ
- ・口過……ヒナン
- ・怨惡……フソク
- ・匪懈……ユダンナク
- ・一人……ワガキミ（卿大夫章4）
- ・不失……トリハツサズ
- ・禄位……チギヤウカクシキ
- ・祭祀……オソナヘチソウ
- ・所生……オヤタチ（士章5）
- ・謹身……リチギ
- ・節用……シマツスル（庶人章6）
- ・博愛……アマネクフビンガル
- ・莫遺……ナホザリニセズ
- ・興行……フウゾクナホル
- ・敬讓……オトナシヤカ
- ・不爭……マンガチセズ
- ・礼樂……サホウウタヒマヒ
- ・和睦……タノモシクタガヒニスル
- ・好惡……スキキラヒ
- ・知禁……ワルビレズ
- ・赫赫……ユユシキ（三才章7）
- ・万国……シヨダイミヤウ
- ・懼心……アリガタガリ
- ・鰥寡……ヤモメドモ
- ・臣妾……オトコオナゴドモ
- ・和平……ヨクオサマリ（孝治章8）
- ・悖德……サカサマゴト
- ・無則……テホンニナラズ
- ・凶德……フラチ
- ・不貴……イヤナルコトトス
- ・可尊……アリガタシ
- ・作事……トリアツカヒ
- ・容止……ギヤウギ
- ・進退……サクマヒ
- ・政令……ハツトイヒツケ
- ・淑人……アリガタキヒト（聖治章9）
- ・居上……ウヘウヘニテハ
- ・為下……シタジタニテハ（紀孝行章10）
- ・大乱……ソウドウ（五刑章11）
- ・親愛……タイセツガル
- ・礼順……オトナシヤカ（広要道章12）
- ・愷悌……アリガタイ（広至徳章13）
- ・争臣……ツヨイケンスルモノ
- ・無道……ワケナシ
- ・令名……ホマレ（諫諍章15）
- ・致敬……タイセツヲツクス（応感章16）
- ・将順……ヒキタテル
- ・匡救……タメナホス（事君章17）
- ・不俟……ナキイル
- ・無容……シドケナシ
- ・不文……ベンナシ
- ・不安……ココロヨカラズ
- ・不樂……オモシロカラズ
- ・不甘……ムマカラズ
- ・哀戚……ナゲキカナシム
- ・簠簋……ソナヘモノ
- ・哀感……ナゲキイタム
- ・宅兆……ハカチ
- ・安措……オサメル
- ・祭祀……ソナヘヲタテマツリ（喪親章18）
- ・長守貴……カクシキヲオトサズ

- ・長守富……シンダイヲクヅサズ（諸侯章3）
- ・不敢遺……オヨソニセズ
- ・不敢侮……ソカニセズ（孝治章8）
- ・不離其身……イチダイブナン（諸侯章3）
- ・言満天下……イツクマデキコヘテモ
- ・行満天下……タレガウヘニオヨビテモ
（卿大夫章4）
- ・用天之道……トキラウシナハズ
- ・分地之利……トコロヲミタテ（庶人章6）
- ・小国之臣……カウタイヨリアヒノケライ
（孝治章8）
- ・三牲之養……チンカクノフルマヒ
（紀孝行章10）
- ・災害不生……イエクニアンゼン
- ・禍乱不作……ゴウンチヤウキウ（孝治章8）
- ・天地之性……イキトシイクルモノ（聖治章9）
- ・天地明察……アメツチニムカフテハザルコ
トナク
- ・無思不服……ココロニカカルホドノトコロ
ハナシ（応感章16）
- ・擗踊哭泣……ムネウチアシズリサケビナク
（喪親章18）
- ・公侯伯子男……コクシユジヤウシユマンゴ
クイジヤウ（孝治章8）

なかには、〈百姓〉（ひゃくせい）のように、「天子章第二」の「徳教加於百姓」（徳教百姓に加わる）には「オハタモト」とし、「孝治章第八」の「得百姓之懽心」（百姓の懽心を得）には「イツカチウ」とするなど、文脈に即して和訓を変える例もある。前者については、「百姓は百官を謂う。『書』の〈九族 既に睦み、百姓を平章す〉と同じ。古（いにしえ）は民に姓無し。姓有る者は皆帝王の族胤、朝廷の官人なり。後世、人皆姓有り、遂に民を称して百姓と為すなり」と注している。〈書〉

は『尚書』、堯典にみえる。〈平章〉は、行いをひとしく輝かしいものにする意。ここで東陽は〈百姓〉を「百官」「朝廷の官人」と解するがゆえに、我が国の実情に合わせて將軍・大名の家臣をいう「オハタモト」（お旗本）と意識してこれにかかる和訓を施したのである。また〈徳義〉も「三才章第七」の「陳之以徳義」（これを陳ぶるに徳義を以てす）には「アリガタキミチスズ」とし、「聖治章第九」の「徳治可尊」（徳義尊ぶべし）には「ミモチキダテ」という。さらに〈宗廟〉の語も「応感章第十六」の「宗廟致敬」（宗廟敬を致す）には「センゾダイダイ」とし、「喪親章第十八」の「為之宗廟、以鬼享之」（これが宗廟を為〔つく〕りて、鬼を以てこれを享す）には「シダウ」（祠堂）とルビを振る。なお、「以鬼享之」には「カミトシマツル」と左訓を附す。

以上、本文に附された和訓について述べてきたが、次に漢文で書かれた注釈をみていこう。「広要道章第十二」の本文「移風易俗、莫善於樂」（風〔習わし〕を移し俗〔しぐせ〕を易〔か〕えるは樂〔歌いもの〕より善きはなし）に注して、次のように述べる箇所がある。

蓋聲樂之感人也切矣。其效至於淪肌浹體、而不自知。所謂默成於風俗、潛移於人心者、其理不可誣也。古者民間俗樂即如今優伶之所爲。故雖小民、可以風動感化、而風俗爲之移易也。竊慨近世所歌舞、尤不禁鄙褻。以綺艶媚惑之辭叙淫佚流盪之行、淫絃嘈雜駕之以行、皆以誨姪誘邪、莫非流毒胎禍。其盪人心傷士氣之甚、俾百鍊之剛爲繞指之柔、風俗之壞、可勝嘆耶。雖然其行既久、未可以驟停乎。若去其淫聲之甚者而專取孝悌忠義節烈之事、以振士風以厲民俗、則今之樂、猶古之樂、

其於鼓吹世道、未必不爲一助也。

蓋（けだ）し声楽の人を感ずること切なり。その効、肌に淪し体に浹（あまね）くして自ら知らざるに至る。所謂（いわゆる）黙して風俗を成して潜（ひそか）に人心を移す者、その理誣（し）うるべからざるなり。古者（いにしえ）民間の俗楽は即ち今の優伶の爲す所の如し。故に小民と雖（いえど）も、以て風動感化すべくして風俗これが為に移り易（かわ）るなり。窃（ひそか）に慨（なげ）く近世歌舞する所は尤も鄙褻に禁（た）えず。綺艶媚惑の辞を以て淫佚流盪の行いを叙し、淫絃嘈雜これを駕して以て行う、皆姪を誨（おし）え邪を誘う、毒を流し禍を胎（のこ）すに非ざるはなし。その人心を盪（うごか）し、士気を傷（やぶ）るの甚だしきこと、百鍊の剛をして繞指の柔と為さしめ、風俗の壞（やぶ）る、勝（あげ）て嘆ずべけんや。然りと雖もその行わるること既に久し。未だ以て驟（にわか）に停（とど）むべからざらんや。若（も）しその淫声の甚だしき者を去って専ら孝悌忠義節烈の事を取って、以て士風を振るい以て民俗を厲（はげま）せば、則ち今の楽、猶（なお）古の楽のごとく、その世道を鼓吹するに於いて、未だ必ずしも一助たらずんばあらざるなり。

〈肌に淪し体に浹くす〉というのは、人の感覚にじかに染み込むことをいう。これは清朝の朱子学者李光地の「楽を聞き徳を知る論」（『榕村全集』巻15）の「言うところはそれ性情に本づき、変化に流れ、その効、肌に淪し体に浹くして自ら知らざるに至る」というのに基づいた表現で、〈所謂〉以下もそれに

見える。〈優伶〉は、歌舞伎役者。〈淫佚〉は、男女のみだらな交際。〈流盪〉は、おちぶれさまようこと。〈淫絃〉は、煽情的な三味線の音色。〈嘈雜〉は、騒々しくうるさいこと。〈百鍊の剛をして繞指の柔と為さしむ〉は、西晋・劉琨「重ねて盧諶に贈る」詩（『文選』巻25）に「何ぞ意（おも）はん百鍊剛、化して指に繞（めぐ）るの柔と為らんとは」とあるのをふまえる。〈百鍊剛〉とは、鍛えに鍛えぬいたはがね。志操堅固の喩えとして用いる。

そもそも礼楽は、古来、儒家で重んじられ、その教えの根幹をなすものといってよい。さればこそ、音楽の持つ抗しがたい魅力にも早くからこれに気づき、先ほど挙げた『礼記』には、「楽記篇」という音楽原論がある。人心を雅正に保つには、音楽もそうでなければならぬと考えるのである。

寛政末から文化文政のころには、江戸のみならず津城下やさらに伊賀上野でも歌舞伎に熱を上げ歌舞音曲に明け暮れる浮ついた華美な風潮が蔓延していたが、東陽はかかる当時の世相風俗に対してこれを度を過ぎたものだとみなし、政治に与る儒者として、どうしても一言せざるを得なかった。もとより歌舞音曲や歌舞伎それ自体を否定しているわけではない。ただ流行の行き過ぎや熱狂ぶりを看過できなかったのである。一藩の教育に関わり世道人心を善導すべき儒者としては、ある意味で当然の指摘でもあろう。『孝経發揮』はたんなる字句の注解にとどまらない慨世の書でもあったわけである。

※当時の歌舞音曲の流行ぶりとそれに対する東陽の反応については、拙稿「覚書：津阪東陽とその交友（一）文化11・12年の江戸」において大田南畝との関わりを論じた箇所でも言及した。

また「卿大夫章第四」の「非先王之法服不敢服」(先王の法服〔格式の装束〕に非ざれば敢て服さず)に注したなかに、「夫新様物一時行來、率皆風流子弟游冶好事所創爲、或出自倡優、而士君子嚮嚮、翕然尚之、輕薄惡俗可慨也哉」(それ新様の物、一時に行われ來たるは、率(おおむ)ね皆風流の子弟・游冶好事の創為する所、或いは倡優より出、而(しか)して士君子嚮(ひそみ)に嚮(なら)い、翕然(きゅうぜん)としてこれを尚(とおと)ぶ、輕薄の惡俗慨すべきなるかな)というのも粹な遊び人や伊達男それに人気役者のファッションが巷で流行し、それなりの武家のなかにもかかる風潮にかぶれるものがいたのを苦々しく思っていたからにほかならない。

それから「応感章第十六」の注のなかで、宋の王十朋が仏塔を礼拝する人を見て声をかけ、そなたには家にちゃんと仏がいらっしゃる。どうしてそれを供養しないのか、といった逸話(南宋・王應麟『困学紀聞』巻7、孝經に見える)を挙げたあと、「此れ人能く親を奉ずれば即ち仏を奉ず。若し親を奉ずること能わざれば、日に香を焚いて百拜すと雖も仏佑(たす)けざるを言うなり。註説に充つるに足らずと雖も、愚俗の為に附識すと云う」と述べていることなども、本文と直接は関連しない記述ながら、他の注釈書にはない面白さの一つである。

まとめ

中江藤樹の『孝經啓蒙』(日本思想大系29『中江藤樹』、岩波書店、昭和49年に収載。校注・解説は加地伸行氏)や熊沢蕃山の『孝經小解』(『先哲遺著漢籍国字解全書』第1巻。早稲田大学出版部、明治42年に収載)など碌に目を通しておらず、中国哲学・日本思想史の専門でもないので、

東陽の『孝經發揮』の我が国における孝經解釈史上の位置づけといった問題については私の手にあまるが、以上述べた内容をまとめると、本書は民を治める武士向けの初学教育のための入門書であり、それとともに当時の享樂的で浮華に流れる世間の風潮に警鐘を鳴らし淳風美俗を保持するのに役立たせる実践の書でもあった。それゆえ漢文による注釈とは別に本文の左側にところどころ和訓を附して文意を平明に説いて初学の者でもよく理解できるようにし、また本文とは直接関係のない逸話を載せるなどの工夫を凝らしており、その点で本文の解釈のみの注釈書とはいささか趣を異にしているといえよう。

附：梶山女学園大学の孝經文庫

梶山女学園の創設者たる梶山正式先生は、「人間橋由来記」(昭和37年)のなかで「諸君よ 人間になろう」と呼びかけられ、それが学園の教育理念として高く掲げられて今日に至っている。ただ戦前には教育のバックボーンを涵養する上で御自身は『孝經』をことのほか重んじられ、昭和10年(1935)には本学園創立30周年を記念して、山添の地に孝經幢を建立された。〈幢〉とは、梵語の dhvaja。もとは旗の類をいう。唐代には仏教寺院で建立された經文を刻んだ石柱(一般には八角形が多い)すなわち經幢を指すようになったが、その後、西土では廃れた。それに『孝經』を刻してあるのはきわめて珍しく、寡聞にして他に例を知らない。この孝經幢は四角柱に青銅板に鑄造した古文孝經の本文(我が国の清原正本に拠る)を貼付したものである。爾来80年以上を閲した現在では、それ自体が貴重な歴史的建造物となっている。なお、幢の完成

に合わせて当時学園では返り点を施した本文と附録に大和田建樹の「母のめぐみ」と題する新体詩とを載せた小冊子「古文孝経」を印刷し、教職員に配布したという。

※孝経幢については、『梶山女学園百年史』（学校法人梶山女学園、平成19年）参照。さらに『梶山女学園の教育をたどることは集一創立から現代まで一』（梶山女学園歴史文化館、平成23年）には梶山正式先生の「孝経幢除幕式の辞」と「孝経解題」（原載は昭和11年度「糸菊」）とが再録されている。また梶山正弘学園長・梶山人間学研究センター長には『糸菊』2015（平成27年度版）の「説苑」に掲載された「孝経幢」という一文があり、短い文章ながら、創設者の『孝経』に寄せた思いや「孝経幢」建立の経緯、戦前・戦後の教育との関係について簡にして要を得た解説をなされており、次に触れる「孝経文庫」についても言及されているので、ぜひ参照されたい。

ちなみに、梶山正式先生の足跡は、須田昌平氏の筆になる『私学人 梶山正式』（梶山女学園「私学人 梶山正式」刊行会、講談社、昭和50年）にまとめられている。

なお、上記の事柄については、梶山歴史文化館の梶山美恵子館長からいろいろと貴重なお話を伺う機会をいただいた。記してご教示に御礼申し上げる。

また、梶山正式先生は江戸明治期に刊行された『孝経』の各種版本を中心として孝に関する諸文献を広く渉猟蒐集することに努め、自らも「孝経解題」を著された。さらに孝経幢完成のおりには架蔵の『孝経』諸本を公開展示されているが、その時の「創立三十周年記念孝経諸本展観目録」は残念ながら戦災で焼失したという。しかしながら、幾つかの重複を含め280点近くに達するその貴重な蔵書は、現在、特別文庫の一つ孝経文庫として梶山女学園大学附属図書館に収められている。そこに本文中に言及した朱熹の『刊誤』、董鼎の『大義』、藤樹の『啓蒙』、蕃山の『小解』、春台の『国字解』、善庵の『私記』それに東陽の『發揮』などが収められているのは言うまでもない。現在、これだけの資料を再び集めるのははなはだ困難である。まずは不可能

○ 古文孝経 甲				梶山女学園孝経諸本目録			
番号	書名	著者名	大小冊数	出版年	出版者		
一	古文孝経孔氏傳 弘安本	阿部正精	大一冊	文政六刊	育徳財		
二	古文孝経 附附説 弘安本	藤原親長	大一冊	昭和〇刊	三徳財		
三	孝経 幼振	東洋文庫蔵	大一冊	昭和〇刊	沢安一		
四	古文孝経	清原尚賢	大一冊	享保六刊	舟橋家		
五	古文孝経	清原尚賢	大一冊	享保六刊	舟橋家		
六	古文孝経 清家正本 再刊	清原宣明	大一冊	弘化二刊	伏原文家		
七	孝経 木忌本	御世世	中一冊	文化三刊	伏原文家		
八	古文孝経指解附説	南宮大吹	大一冊	明和四刊	猿翠		
九	古文孝経指解附説	南宮大吹	大一冊	天明元刊	猿翠		
一〇	清刻古文孝経序跋	木村孔恭	大一冊	天明元刊	嘉靖堂		
一一	清刻古文孝経序跋	木村孔恭	大一冊	天明元刊	嘉靖堂		

【図版②】

といっても過言ではない。戦後まもない昭和24年に油印（謄写版）の『梶山女学園孝経諸本目録』【図版②】が刊行されているが、専門家や研究者から高く評価される一大コレクションでありながら、その存在を知る向きは学内でもそう多くないのが現状であろう。経書を中心とした漢籍を集めた八木文庫や近代短歌研究に欠かせない山崎文庫などとともに、本学の誇るべき文化遺産として図書館のホームページ上で紹介し、その存在を広く世に発信していく必要があるのではないだろうか。この際、そのことを関係各位には切にお願いしたい。

※八木文庫については、中国哲学を専門とされた故森川重昭教授による『八木文庫漢籍分類目録』（昭和54年）が、また山崎文庫については、近代短歌を専門とされた荻野恭茂元教授による『山崎敏夫文庫目録』（昭和62年）がそれぞれ作成されている。

孝経文庫については、先に注記した阿部隆一・大沼晴暉「江戸時代刊行成立孝経類簡明目録」に「孝

経の蒐集として世に名のある」ものの一つに挙げられている。

蛇足ながら余談として

昨年、「孝」や『孝経』に関する研究書が相次いで刊行された。一つは「二十四孝」に代表される孝子説話をめぐる表象およびその機能を明らかにしようとする宇野瑞木『孝の風景—説話表象文化論序説』（勉誠出版）で、もう一つは佐野大介『「孝」の研究—孝経注釈と孝行譚の分析』（研文出版）である。またこれは20年近く前に出されたものだが、孝の精神に内在する母性原理に光をあてた下見隆雄『孝と母性のメカニズム—中国女性史の視座から』（研文出版、平成9年）も大きな成果である。さらには池澤優『「孝」思想の宗教学的的研究』（東京大学出版会、平成14年）もある。中国のみならず日本や韓国といった東アジア漢字文化圏の精神史においてかつて果たした役割を学問的に検証することはきわめて重要で、これらの研究は、先に挙げた加地伸行『孝研究』ともどもそれぞれに大きな成果を挙げている。私の偏見かもしれないが、古典研究において、よしそれが文献学的な地味なものであっても現実社会と全く無縁ではありえない。何を研究対象とするにせよ、一見するとそれが實際上役に立たない迂遠な研究のように思えても、研究者が問題意識をもって対象に迫るとき、その心のどこかに自分の生きている現代社会の抱えるさまざまな課題と通底している部分があるからだ。

ただそうはいつても、実のところ現代において「孝」とは、あるいは『孝経』とは、厄介なしろものである。拙稿の「はじめに」で、東陽の『孝経發揮』について、これまで敬してこれを遠ざけてきたと述べたのも、そのこ

とと決して無関係ではない。というのも、明治23年（1890）に発布された『教育勅語』と相俟って戦前、特に軍国主義的色彩が強まった一時期、初等中等教育の現場で忠孝ということがあまりにも声高に叫ばれすぎて、「孝」とか『孝経』といえは、それが古いイエ意識とも結びついていたこともあって、戦後はさながら儒教道德の権化、封建時代の遺物のようにみなされ、それゆえ忌避されてきた経緯があるからだ。

そもそも「孝」という字それ自体は、老人に子どもが寄り添う形をあらわした会意文字（後漢・許慎『説文解字』）で、親に対する子の情愛をもとにした自然な感情のうるわしい発露に基づくものである。ところが、それが礼教という形をとり規範化され権威づけられると、その説き方しだいによっては、逆に人々の意識や行動を縛り、場合によっては苦しめる桎梏ともなり得る。

例えば、親の死はとても悲しいことである。悲しみのあまり痛哭し、食事も満足に喉を通らないこともあろう。ましてや身なりなどにかまってははいられない。これが礼として規定されると、親の喪に服している間は、麻の粗末な衣を着て薄い粥を嚙り、決まった哭礼をしなければならぬ、となるわけだ。それに反すると社会から指弾されるのである。

ただ、こうしたことがすべて孔子の教えに内在しているのかと言えば、そうではない。孔子は「三年の喪」は長すぎるから一年で充分ではないかと主張した弟子の宰我をたしなめながらも（『論語』陽貨篇）、別のおりには「礼と云い礼と云うも、玉帛を云わんや、楽と云い楽と云うも、鐘鼓を云わんや」（『論語』陽貨篇）と言ひ、儀礼や雅楽は形式よりもそこ

に込められた思いが大切だとも述べているし、また孝について弟子から問われた際には、その個性や境遇に応じた答えをしている（『論語』為政篇）からである。

さらに『孝経』の内容とは全く関係しないものの、旧中国においては明清時代を中心として、薬になるからとして病気の母親に子が自分の股の肉を割いて食べさせる（これを「割股」と称する）といった、まさに異様奇怪としか言いようのない行き過ぎた孝行の話がまま見られる。桑原隲蔵『支那の孝道殊に法律上より観たる支那の孝道』（『支那法制史論叢』所収、弘文堂書房、昭和10年刊。後に岩波『桑原隲蔵全集』第3巻。さらに『中国の孝道』と改題して講談社学術文庫、昭和52年に収録）を読めば、そのさまざまな具体例を知ることができる。また中国近代において社会に巣くう礼教の欺瞞性や虚偽性を鋭く剔出した魯迅は子ども時分に「二十四孝」の絵入り本を読んで、貧しい夫婦が母親に満足な食事を与えられないので我が子を口減らしのためやむなく亡きものにしようとした「郭巨、子を埋む」の話を知り、やがて自分もそうなるのではないかとおびえたという思い出を「二十四孝図」のなかに書いている（『朝花夕拾』所収。学研版『魯迅全集』第3巻所収、昭和60年）。

しかしながら、わが国の先人たちが『孝経』に見たのは、当然ながらそうしたグロテスクな負の遺産ではない。人としてのありようを説く『孝経』には、「親を愛する者は人を悪（にく）まず、親を敬する者は人を慢（あなど）らず」（天子章）という一節もある。津阪東陽はこれを「親をいとおしがる者は人を好き嫌いせず、親をたいせつにする者は人をないがしろにしない」と解し「孝とは愛・敬の二つに

ほかならない」と説いているが、その根底にある理念は人間尊重の精神ともいえるものである。東陽もそれを感じ取っていたにちがいない。

ここで一つ、私事に渉る事柄を記しておきたい。南伊予の片田舎に住む私の父親が腎不全を患い十数年も人工透析を続けたせいか片足がむくみ壊死しかけ、医師から切断したほうがよいと勧められたとき、「シンタイハッピーコレヲフボニウク……」と呟いて、これを頑なに拒んだ。齢93を越え、己の寿命を悟っていたためでもあろうが、周囲にいた年若い看護師には何を言ってるのか、さっぱりわからなかったという。気が動転した年寄りの世迷い言ぐらいにしか受け止められなかったようだ。大正9年（1920）生まれの父は高等小学校卒業で学歴のある人間ではないものの、おそらく子どものときに聞きかじった言葉を覚えていたのだろう。兵隊にとられて無事に帰ることができ、80歳になるまで製材業に従事しながら、その間に労災や事故にも遭わず、90過ぎまで命ながらえた以上、わずかな数年の延命のために片足を切断するのを躊躇したのだと思われる。その後、半年もたたず、父はみまかった。

『孝経』において孔子から孝についての教えを受けたとされた曾子はその晩年、病篤になったとき弟子たちにこう言ったという。「予が足を啓（ひら）け、予が手を啓け。詩に云う、戦戦兢兢として深淵に臨むが如く、薄氷を踏むが如しと」云々と（『論語』泰伯篇）。父母からもらった身体を傷め損なわないように慎重に慎重を重ねて生きてきたというのである。手足に傷跡一つない和解する向きもあるが、そこまで厳格に言っているのではなからう。

手足を損なうことなく生きて来られたのは全くの僥倖の結果に過ぎないが、そういう言葉を吐いて最後を迎えられるのは、なんと幸せなことかと、姉から父親の話を聞いてふと思った次第である。〈孝〉とは、自己を犠牲にして親に尽くすことではない。むしろ自分の命を体を粗末に扱わず、これを全うするという教えでもあるのだ。先に「人間尊重の精神」といったのは、そのような意味合いをも含んでいる。

テーマに掲げた津阪東陽の『孝経發揮』からは少しく逸脱したかもしれない。だが、今回、『發揮』をはじめ関連の文献に多少なりとも目を通して見て、『孝経』が封建道徳を説いているから現代において価値がない無益だと一顧だにせず捨て置くのも、いかがなものかと考えるようになった。親をたいせつにする子が親となって我が子を虐待するはずがないと思うのだが、それはあまりに素朴単純なものの言いにすぎるであろうか。